ホリエアツシ [STRAIGHTENER] with Marshall ASTORIA Series

鳴らした瞬間、彼を虜にした珠玉の音色

「ちょっと新しいマーシャルを弾いてみたいんですよね」と、アルバム『COLD DISC』の取材後に語っていたホリエ。そして、ツアー突入後に話を聞くと、なんと今まで愛用してきた同社製JCM800から、歪みのメイン・アンプを今年発売されたばかりのASTORIAにツアー後半から換えるという情報が舞い込んできた！ “これは話を聞かねばならない”とGiGSは意気込み、早速リハが行われている現場へ直行。まさにこれから新しいアンプを鳴らすという場面に遭遇することができたのだ!!

Text／KOH IMAZU, AKIRA SHIGEMATSU [GiGS / Equipment]　Photo／REISHI EGUMA

商品のお問い合わせ先／ヤマハミュージックジャパンお客様コミュニケーションセンター
ギタードラムご相談窓口 [0570-056-808（ナビダイヤル） http://www.marshallamps.jp]

長年Marshallを愛用してきたホリエとASTORIAが出会ったキッカケとは?

“これだったらエフェクター、いらねぇぞ”って思えた

――そもそもなんでマーシャルだったの?

ホリエ:高校のとき、初めてギターを買って地元のリハスタに行き始めたんですね、一応歪みのエフェクターは持って。そうしたら何番目かのスタジオにマーシャルがあったんですけど、鳴らしてみたら“これだったらエフェクター、いらねぇぞ”って思えたのがキッカケですね。

――よく歪む、という部分に惹かれた?

ホリエ:そう。しかも当時好きだった“Green Dayがハムバッカーでパワー・コードを弾いたときの重厚な響き”が出た! そこからです、マーシャルの歪みが欠かせなくなったのは。最近でこそいろんなエフェクターで音を作ってるけど、昔はアンプの歪みだけでやってたんで。

――そして、その後JCM800を購入。

ホリエ:確か下北沢SHELTERでの初ワンマンが決まった頃、そろそろ自分のアンプを持つべきだろうってなって、人から譲ってもらったんです。その当時はJCM800が欲しかったというより、マーシャルが手頃にな値段で手に入るっていうのが魅力だったんですけどね(笑)。

――それをいざ使ってみてどうだった?

ホリエ:当時STRAIGHTENERは2人でやってたから、ベースレスを補う低音をカバーするためにオクターバーも使って、アンプ直の歪みでとにかく太い音を鳴らしていました。

――しっくり来るようになったのはいつ頃?

ホリエ:ヒナッチ(日向秀和/B)が入って、無駄な低音を削るためにギターをレスポールからSGに変えて、同時にJCM900に変えたんですけど、その後OJ(大山純/G)が加入して音域の棲み分けを考えてJCM800に戻したんです。

――ということは、初めて買ったアンプを延々とメインで使い続けてきたわけだ。

ホリエ:ですね。使っていない間にJCM900はどこかに行っちゃった(笑)。

――縁があったアンプが残った感じですね。

ホリエ:はい。ホントに使い古してて、音も変わっていったぐらいで。

――どんな風に?

ホリエ:“歪みってこれだろ!”っていう部分は変わらないんだけど、トーンとしては丸くなってきました。この間、新しいJCM800を試させてもらったらもっとガシガシした音でしたからね。そういう音も嫌いじゃないんだけど、自分のアンプのような丸くて温かい音色が気に入ってるんですよ。最近、年のせいか新しいものはちょっと、ってところもあるし(笑)。

――すぐ飛びつくには腰が重い?

ホリエ:そう、腰が重い(笑)。

――そうは言いつつも、今回のお題目であるASTORIAを買ってしまった。

ホリエ:最新のアンプ…ですね(笑)。

――しかも、いきなりメインになるんだとか?

ホリエ:その通りです。

――すごい大抜擢だけど、今回はどんな出会いだったの?

ホリエ:今やってるツアーの前に出会ったんです。確かGiGSの取材のときに「ASTORIAっていう新しいアンプがありますよ」って聞いて、その後マーシャルさんに行っていろいろ試奏した結果、“これだ!”ってなったんですよ。

Marshallが満を持して発表した“ASTORIA”シリーズとは?

1962年に最初のアンプが製造されて以来、常に“ロックの世界標準”とも言うべき名アンプの数々を誕生させてきたマーシャル社。そんな同社が、50年以上にわたって積み上げてきた技術と経験のすべてを結集して完成させた圧倒的なブティック・アンプこそ、イギリス・ロンドンにある伝統的なライブハウスの名をモデル名に冠したASTORIAシリーズである。

ラインナップするのは、極上のクリーン・サウンドが目指されたASTORIA CLASSIC、艶とサステインのある上質なドライブ・トーンを創出するASTORIA CUSTOM、そしてその両方を兼ね備えたASTORIA DUALの3モデルだ。

厳選された真空管とハンドワイヤードの基板を搭載するASTORIAシリーズは、マーシャル従来の太く張りのあるトーンを、どこまでも深く解像度の高いサウンドでクリエイトしてくれる。3モデル共通して、プリ管にはECC83(12AX7)を採用し(ASTORIA CUSTOMとDUALは4本搭載、ASTORIA CLASSICは3本搭載)、パワー管としてKT66を2本装備。加えて、最もシンプルな仕様のASTORIA CLASSICには付属されないが、ASTORIA CUSTOMにはエフェクト・ループとブーストのON/OFF、ASTORIA DUALにはチャンネル切り換えとエフェクト・ループのON/OFF機能を備えたフット・スイッチも搭載されるので、スイッチング・システムを併用した現代的な使用法にも対応してくれるだろう。そんな3台の中からホリエが試奏し、その場で惚れ込んだモデルがASTORIA CUSTOMだったのである。

ASTORIA CLASSIC ¥391,500 [税別]

▲極上のクリーン・トーンを突き詰めた結果、クリアでありながらどんな帯域に音作りをしても温か味が失われず、真空管ならではの豊かな倍音を含んだクリーンを生み出す珠玉の1台。そのため、搭載するチャンネル数は1chのみだが、エフェクターを駆使して歪み等を作りたいギタリストにとっても究極のアンプだと言えるだろう。

ASTORIA DUAL ¥425,500 [税別]

▲最上級のクリーンを生むASTORIA CLASSIC、軽やかなクランチから深い歪みまで創り出すASTORIA CUSTOM、その両方のサウンドを1台で実現可能にした、最もサウンドメイクの幅が広いモデルがASTORIA DUALだ。なお、3モデルそれぞれにコンボ/ヘッド/キャビネットがラインナップされている点も注目ポイント。

ラインナップされた3機種の中からホリエが手中に収めたのがこのモデルだ!

「最初にJCM800やJVMを試して、最後にASTORIAのうちの2機種を弾いてみたんです。CLASSICのクリーンも良かったんだけど、今回はアンプの歪みだけで気持ちいいところまで持っていけるものが頭にあったんで、結果的にCUSTOMを。これがホント良かった。すごい好みのクリーンからすごく好みの歪みまでの両方が出せたんです。ハイブリット感とイナタサのバランスもいい。試奏時間は10分ぐらいだったんだけど、“これを自分のシステムに入れた場合…”のイメージまでして。で、結局、名残惜しくなって即決で買うことにしました(笑)。STRAIGHTENERで言うと、今OJの音がミドル寄りになってるから、それを包み込むようなサウンドがいい。そういう意味でも重厚感と高域のヌケの良さがあるCUSTOMは最適だったんです。当日試奏したのは家用のギターで、以後音出しはしてないから、今日これから初めての本格的な音出しなんで、ドキドキしてるんですよ(笑)」(ホリエ)

ASTORIA CUSTOM

¥408,500 [税別]

Specification

Watt:30W／Controls:MASTER, EDGE, BASS, MIDDLE, TREBLE, OD VOLUME, OD GAIN, CLEAN VOLUME／Input:HI/LO(HI provides +6dB Sensitivity)／Other:VALVE RECTIFIER, VALVE DRIVEN FX LOOP, BODY, BRIGHTNESS, POWER REDUCTION(5 WATTS), LOOP, LOOP LEVEL／Size:600(W)×540(H)×230(D)mm

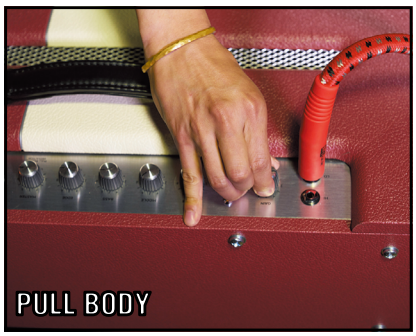
初めてスタジオで鳴らした現場で、ホリエが即座にサウンドメイクした音とは?

「ホントに今日初めて鳴らしてみるんですよ」と前置きをしてから、すぐさま音作りをし始めたホリエ。そして数分弾いた後、右に紹介している状態へとセッティングしてみせてくれた。「まず、ブーストOFFで作るクランチ・サウンドがとにかく気持ちいいですね。結構歪ませてもみたんですけど、全然音がつぶれずにコード感が見えるし、コードが広がってく感じもしっかり出てくれます。それで、セッティングはそのままにした状態でフーストONにすると…とにかく太い。パワーが超あるから、ゲインは9時方向ぐらいで十分歪みます。でも決してうるさくないし、耳に痛くもない。初めて使うからブーストのON/OFFでパワー感に差があるけど、これを突き詰めればどっちもすごくいいサウンドになるんじゃないかな。今のところはブーストOFFの状態でマスターを上げたクランチが一番グッときてる」(ホリエ)

▲鳴らし始めてアッという間にホリエがセッティングした状態。ブーストをOFFにし、ゲインを抑え目にして、ミドル／ベース／エッジ(パワー管の高域コントロール)をやや上げ目にしてある。この状態でマスターを上げて作ったクランチ・サウンドが、まずは気に入った様子のホリエだった。

その他、現場での解説で初体験した機能によるサウンドにも驚愕したホリエ

続いて、現場に立ち会っていたマーシャルの担当者から、「ゲイン・ツマミを引き上げると低音域が、トレブル・ツマミを引き上げると高音域がブーストされるんです」とのアドバイスを受けて試してみると「おおっ!」と驚きの声が。「これ、ヤバイっすね(笑)。これだけいい音でいろんなバリエーションが作れるなら、レコーディングでも重宝しそう。レベル感はそのままにブーストしたりブライトにしたりできる。ブーストしてもうるさくなくて耳に痛くない。コードが綺麗に響く。いやー、すごいアンプだ。試奏したときも“ここから動けない、買わずには帰りたくない”って駄々っ子みたいになったんですよ。ホント、求めていた音です(笑)」(ホリエ)



▲ゲイン・コントロールを引き上げることで低域をブーストする“プル・ボディー”機能。サウンドの太さが一気に増し、30Wアンプとは思えないパワフルなギター・サウンドが鳴り響いた。

▲トレブルを引き上げると、今度は高域がブーストされ、ホリエはアルペジオを鳴らしながら「すごく繊細な音だ」と納得の表情。また、マスターを引き上げることで30W出力を5Wに抑えることも可能。